普通書翰文

完

特別
イ 4
3152
62

14
3152
62

95-119

普通書翰文

書翰に表れたる法意

二

久保天随著

せん書翰にて必要なるのみならず又語るべき書翰文にてなければ言語に過ぎたるはなしいかに形式の上にいかに巻末の俗文もちゆるしなきめいたる女子信用語ちゆるし四角張つた漢文直譯調にあらざれば又言文一致の調子口語文かく流行するまことに日本語独特の大いなる勢力に於て生活人

と云い況や小たやうなる家又他方に於ては
高貴往来殿の候文の後活字一部の書籍
家の間に行はるるに過ぎず之れ世間尽でる書籍文
殿の流行とは刻下の度ては単なる理
想で何時実現されるか九分分らぬようなる
事から。
天来書籍文は第人的にせんと必要で為の
社会に存する者は天に因って思想
を伝達し要路を交たすことんなりと云ふ
まれば所謂用法の云ふまでも求める

十ノ十 松屋製

極めて平易に言語を一致致候様正
しく書用の書籍を結延すれば不便に帰し
ないでする。
一方書籍に依るは自ら文語を異にし
たるに一本調子では面白くない上記
の俗語文語今日の用は五十歩百歩で選んか
善かろうと思ひ中略二分は程も煩はし
いやうでするが、又仰も文語なるは今日の原
因と必要とのみん自ら出来ない出来ない
ことも無いが、之れの理由なること敢て挑

文章の特長を際立し
て明瞭なる所に存する
ことは一番
全半慥安の見解い相違なし。但初年の
人間にとりては陰陽とも不等分給強を
陽の同一種類的の
しかしては蒙碗素
的文章を作ること
はいとうにて宜しく

（三）

文章は要する
理想は言ふまでもなく
主の事で書論文の
（十字十松屋製）
に存ずべし

三

文章の商物か刃の要件である
無論必要なる形容詞定冠詞は
つい落を終れば善い但しみだら
ものに於ては強い説明して主角を表はすべ
又文章に対する教育を先はなしの
消して有いはずに
時を要するやうな物事に於ては今日として
同様に以ては宜しく練習を積人へ力あり
紙連いやはなれ
説明同時に商明の説明
説明同時に命令
説明に不好の低回を除

て結人に面立せぬ場合もあるが、之は時と事柄とによりて異なる事にて、一概に論ずべき範圍にあらず、宜敷その程度を保ちて、いつまでも拙劣しかやうに見えるのは善いが、のべつまくり無味淡泊で殺風景なのは、人に電信文に類する感を与らしむる虞あり、又無愛想の程度を超ぬ事、甚だ面白からぬ事、なるべく印象が不明瞭にならぬ様にすること、あらうの間、必ず的に何すべき程度の今日は、全く自分自身に注意するより外はなし

書翰文は律儀に使用すべき事、なれば代表者の意思を傳ずるものなれば、重要なる注意に特別の考慮を作ることなり、殊に今日の文章一般に於ては、長句の綴で書翰文に於ては、なるべく簡略にして、此際に矯正せねばならぬ、文章は簡略なる程、その効果大なるものなれば、書翰の書式より、用語に至る迄、その必要なる部分を省略し、書翰文の簡潔なる性質を知らしむる事、なるべく無駄なる言句を避け、主旨を明瞭にする為、文法上の優雅を失はざる程度を考へる為、起

一般世間一般に詩の作者の実人生に
知って書物文の要い実人生に考へるのなかぬ
かまことに許かられ事である。をそで書物文
の作者は不を押詰めれば詩作に俗
の作者の他美を促進する一法なるのである。
陶冶として達意説を文章を律せもとにに
同家の美を形成する第人である。文章は用
務さへ新しかれば書物の目的は達せられて
としてのは祖幸福を形成する路の一番である。
かうするあるべし知識の高位ある人で書物

を作ることのなかるを知って初て書籍を要人
高位に昇ることにたのでもまこと
い概説をこと出来るか。

(三)

書籍は短くして多いのが一番である
のは世間多数の唱つることである
例へば本多作左衛門が陣中から共
妻に宛つた手紙は一重壁に人の思が
よく活かされ医師や此と撰で出人
て来るの者である。故に第の見ひ

深なるを以て
一種の御想を借りて来る
の世叔言あり趣味あ
き仲士が雷同附和
雖かる理由は
書翰に多強
も時々あらず長く
今もあらず4里相離れ
時々は室を同の
間せる 陸軍を併記
この長
いの

成しいからし〜ふらふら
無のを不虞の事を
い長文の書翰を
しんの心を
この性質上
分事情を
世ねばならぬ
いかも
を迎つ
と

さて書籍文の長短は勝手次第にすべきものとは云へ時と事柄とによつて自ら其仕方のあることを考へる。

四

書籍と字引とは緊密の関係を有して居るものである。伸吉の一度拵へた字引も上手で明かなる如く正確なる如く主要なる部分を具へ書籍の一部として居たが比較的簡単なるものであつた。今日の教育

上手なる字引を作るのみ重要なる小学校一三枚を書き終るまでは出来ないそこで予の考へは所謂小説雅書を後回しにして時間を割いて字引の編纂に専心なるべし。

書籍文は一時間に不足なる時間にたつぬ書を作るとこの思い出話しを書くも時間を遣ふことを知あれば

書籍文は字引の編纂に専心なるべし。

加ふるに時間語数多く且つ運筆の迅速

従つて信の筆跡は往々相違することも場合によるを

字即ち平仮名皇后の御筆蹟なるを

経(はしります)手紙を書くことを、ひどく億劫

がる世の人重要なる社会機関を無視

して其の根本にもなく一種の非社会的

な人物に成り下つて仕舞ふことである

●昔は古人書の日長く昔ふ老人の話では世

事は将来社会に立つておいて為すところ多

しとする以上は必然、殊に必要として能く

べからざるものである

四(五)

書翰の修練 一時習練で 書翰を物するの

に下書を要することもあらうが、然し急ぎの

場合などは、かるく書き流して文意を

推敲するもゆかない。然し心静かに

思案して筆を執れば、初から書き

やうん事を心かけ下書きせずにも

いはゆる場合は下書きをとらぬ無駄

あるにせねばならぬ。それで修行の

陸稿とかくまでは、なるべく書き換へて
一通に成るまで遅くて置くが善からう。
人に見せない場合でも書翰を認め
終つたならば必ず一晩寝かして
置いて翌朝読み直すのが善い。心に思つて居ても知
らず識らず荒い文句を使ふことがあるから
で注意の通じ難くなることがあるから
吉凶の有無で言葉が全く正反対
になることもあるから
慎重の注意が必要である。

十ノ二十 松屋製

書翰の形式のことは一定書式通例
良く分つてゐるが、なぜ思ひ切つて
古来一種種の書式を捨て、その長所
今日の実用に適する様に
まとめあげて、簡切にして
置く様に成ることは知つて
居ても、なかなかこれ、加減の
効能の書翰を作ることの二三を左に掲げ
ることにしやう。

（六）

書翰を認めるに際し用紙全部に対する

俗世間ならば筆を執って賜ま
いの所なれば無作法なれども
やはり正式にて正式いらば
明治以前は分一字づつも
兎に角一行だけ詰めて一字分の
俗白が有って初めて又その後に正式いらば
俗語なら筆初まって間三寸の俗白を取
又文書類の表の物は同じく三寸
の俗白を取るものが法にて候
長くなる長くなるとなってはいくらも
書けて

俗白が多ければ善い
第一番目に俗白の二寸
の場合なれば
文字の間の書類文字の行幅一行より
一行半位まで
嫌うと言いやうにして世
の方は横半
なるとは
の細かい俗白の
ものから
ものから
俗白たるものは
隙間
行幅
小字
二寸
大字
弾
形

書は同志の間へ廻一枚いたゞきまゝ取ねば用
なり為不文句も遠慮なく書を日なるなら
は金ゝ伯父ゝ伯母ゝ叔父ゝすきかつての家よ
りかんぺんの金ゝ書■右名ゝかんインキの数
りんゝ人たのなどは強て強い
たゞ■て■ 只■ 簡しく 簡単に法式とあるが古来
如ゝ■■■ 今日ゝも■ 主要なる
法意の■ゝは
(二) 自梅の代名詞ゝゝ松ゝ竹ゝなどは小さく
封面の代名詞ゝゝ書君閣下ゝなどは大き

十ノ二十 松屋製

く書くが善い
(三) 封面の代名詞は行を改め
而も高く行頭に高くやうにさよう
(三) 御の字を行まい、候の字を行頭に置
くは、ゝゝ宜しくゝゝたゝい家名なる
或は行よりも信へけみ出て
点ゝゝ改めるやうにさよう
(四) 人の姓名を二行に割る時は軒の形ん
為ゝ右様で隅ん宜しくゝゝ
(五) 敬称は二行に割らぬが善い

（十五）文中に傍線を引き抄する時傍線は行線より一字下げ線は上の句を行線より一字下げ下の句はその行より更に下げて書け

（十六）片仮名を平仮名を混用してはいかん片仮名に限ることにせよ

（十七）全文を通じ活し一定せしは成るたけぬやうにして殊に一語一語を一ち時にはいつも明白にその活しを表はしてその傍へ逐一して置いて其の善い

（十八）

（十九）本文中の本文は殊に大切な部分であるから大に注意して誤記などの無いやうにせよ

（二十）名前は殊に明確に書け字書の曖昧なる文は全然誤りたるよりも失礼の甚しきものである
その他皆一々割り出せば自ら序あることが出来る

（廿一）

それから書籍が足りない時は書けたことを書いてるで

で四寸の表を出して陸から差出す封筒の
帳面にして一章に書きかゝる表にても
宮のある方を外にして老を入陸を後にして
書いてはなるべく二ツ寸法にして先方の
拝閲い便りする言い年月日をしてある又宛
名の位置を考へ封目の書上に成らぬや
うに注意して書く事
封筒の法には右の如く長形にして
がゝる長形は表裏共
用ゐる所 何も並べる こゝ迄

十ノ二十 松屋製

封筒の表面には先方の住所を
書き宛名の位置は
の所住所の強てあるが如く便利出すには
しつかりとする 便の初に宛名
書きはじめ 封筒の中央に分階書
で筆たん正確 強い調める宛名
の脇付はその人を尊敬する意い出し
侍史 座下等を用ゐる
侍史 又書物の
特筆 他人を運ぶ
拝啓 無事
表裏 平信 平安

拝啓

要用を表するには要信要用、急速を要
表するのに急用至急を表するには
電報等彼等の字を用ゐるか書信時
を節約とし用ゐ出るくらい敬語すべきである
次に封筒の第一面には「封緘」
「親」等の字を書し又用のように印を押
すべきのに自己の住所氏名は不必要と思つたが郵便
の住所氏名は不必要と思つたが郵便
について何の都合で迷ひ住所又
年月日は必ず必要と思ひます住所
では

覚え
覚えて居ないとやはり大時間
は使はなくてもよいとの二つ不断の面倒から
出た所の所為と解釈する習慣として
出来ます
上に述べたこの二つ一寸変なと按雑な
面倒なやうだが結局最よく見定
信者の彼岡に煙すると者
らるこの歌念に信仰
明の事と自分の道徳
為に死ぬとは光の光
為に死ぬとは善
郵便局長から

なる陸奥守が、そのかの御使を引受けることをいやがる

二 吉田の方に明確な書きこそ、加賀藩の威力者に
なる行載―郵便局を探かへ云ふる
らなといふ伝説を持ちぬこと

三 吉田五郎。時門前近辺なる書く
時には素晴しい詩―くその
家の所在を指示おすること

三 吉田で夜庭拝見した時
は必ず吉田と明記すること

吉田

四 同市を弾劾したることは
ただ同書地に海原に会み、水仕只
別源に吉陵刈に吉陵刈に
と題とすること

五 同所に記した時は必ず某氏
明白附記すること。同居四人なるよ
稼ぎ方法を忘しめてはなれ
ぬ門前に詩二首―号美所に屈し出
て愛信に使すること

六

無字書は最も簡単な書法を極めたもの
で人間関係の性質の像である
之は別章で述べる
㊁無字書は紙面の狭いときに使ってもよい字の文
字を自分の簡単で亜亜に書くこと
むやみに文字を充たすこと学生林
などは最も注意せねばならぬ
㊂はしめん字は大きくし絵に近づ
いて俗に云ふそうなるのは明分に考へ
なくなる故に平と孰よりの線

無字書は行書の大部を省略し
あまりいとしく文字の不揃のないよう
にする書法である
㊂毎月日あきはたんに裏面本文の
書行に加へ置くかまい
㊃表面の宛名は分後特殊に目明瞭の
ようにし宛名の脇付などは無い
方書
㊄自己の住所は表面に書かず書
ひらう速早く受信者の住所を喚起

文集の文句を作なして他人に見
せる作法をもつてゐる。
㈥ 書止めを作るとき作法今の如く
て書かぬが第一番に他人に
の迷惑をかけるよりかたの事
㈦ 往復文書には直信用の表面書
とつけてはさぬやうよく注意し文
はを結びて書き始めよ
㈧ 略字を書き初めて又別に言葉をきこと

ある。漢文を和文に直す。
㈡ 書簡のひどん文は信用を高く
ことのするみな時間浪費をなくす
㈢ 外国語を和文に直す場合語
を書き用ひは四字熟語に
なるべく用ひべきこと
㈣ 拗音は小書の平仮名を用ひ
形をいるまつて
形式にかなつて結び文をくこと
㈤ 拗音は同じてはインキを用ひヤンで書く

㋑ 元が善ことの方ら今日善四用
する漢字は、すべて出来上り手習を
用ゆるよりも却て作らんよりも
なることを示すにはなるべ
㋺ 信を書の相ゆるあい係白に筆硯なども
無ければ用ゆる細ひなるを出来る
だけ書きたるは相のてんぺきしてする位
なるべ故ないのかと思はぬ
㋩ 信を書の信のゆるは用者の趣味の
高下を現はすものであるから随分注意な

はなるべく女偏時丈さてを義士史
の写真を掛り込まは用者の
相を現はすを思うに堂々眉を
しめる
㋖ 書は絵を書の先命てるあり分別文字
の正い陰をゆやうよ
㋗ 絵書の絵を書はその地その時特色
の結ねをしのばしめるものを探ぶが善から
う
㋘ 四年を過ぎ教ら而降ては書事の

書翰文の作法

書翰文の作法は一定の型式を備へたるものにして、その型式は時代によりて多少の変化あれども、概ね古来の慣例に倣ひ、別段目新しき工夫を加へざるを可とす。書翰は唯一の要件を簡単明瞭に認めて、相手方に了解せしめんことを期すべきものなれば、書翰は角ばらず割合に立派なる書翰なりとは言ひ難し。

書翰は相手方に了解せしめんことを期すべきものなれば、書翰は正直に、

言葉の張り方がなるべく平の張り方がなるべく不自然なるが、なるべく自然の事なれば、間違つたる事は正しく、明瞭に書いて、新しい熟語を使用するは、なるべく書き方にて、なるべく簡単なる方がよろしい。

(一)

なるべく簡単なる書は手紙にて、なるべく簡単なる方がよろしい。

(一)

違
言たりとて又昨年と云ふ頃で前
いるとは云つても
特殊の方法をもつて
出者として横合から
自分から進んで書
いのでその男は
年の暮に日記を書
事を問題する
て故文章
ずい言
役

世間いは角
迄事を言越さぬ人
ることである
牛鍋を出れのである
の話をなぬ
旦つその人
少して
さめて
也つて事
遣を出

十三十松屋製

2

無理
人間事の
不い
の事
海軍
ちなと言
つまり
他人の
仕方
種々の問
なる

輕くあしらつてしまふ人もある、又[illegible]歴が
悪意があるのではないがつまらぬ自慢
をする一大悪癖のある人がいふ手まんな
このである。すこぶる自慢は非常の賤しむ
べき(?)ある。何事へつけても生憎面白からざる
我が卿人は往々にして遺憾ながら其の癖
が非常に多く[illegible]は往々にして信用
を失ふかもしれない。まことにあさましい
ではないか。謙虚さといふものが度い處である。

或は多忙といふ言葉をよく吐いてゐる人がある。
あるいは其人が多忙な人だらう
か、分からぬ(?)の様(?)が無くてはとても[illegible]
の様(?)くるものはないか。仕事(?)が如何に大きくても
其の人は分を守るものは一つの[illegible]がある
[illegible]を[illegible]をかけて(?)茶を飲み酒を飲み[illegible]
[illegible]を[illegible]み、雑談[illegible]その[illegible]時間は
[illegible]でありて[illegible]睡眠をとる[illegible]が長い
[illegible]息の時間がある。そこでへ[illegible]
[illegible]以上の時間を[illegible]のゆとりがある[illegible]

作文の方法は　まことに造作もないことであ
る。作法は難解な感情の発露としての出来事で
形式的で無く　眞は自由にかくことが出来る
その上實用の手紙にしても必ず一定の法
以上書いたことは毎日直さずして之を重要
脱せずることも成る　小は早くから善良
なる習慣をつけ　手紙を書くは此段
すべて返事を出すやうにするが善い　然
かし事件の進行はなかなかしかりする時すでに
勉ら角出られき　機務をかし置きを決

22

して如何なる事でも先方に知らせよ　善い
かくて一日の中一定の時間を定め　書翰の
執筆に充てて置けば決して間違はない
又返事を出す必要がなくても　先方から
の手紙を受取つたら　必ず相手の用
に答へることが出来たならば　全然関係なき地
事なるを確かめ　不足を申して　遊ばずか
善いので　学んだ者は　必ずに依つて無限
の趣味を感じ　感あることあらう
手紙は　大のやうな　金言屋體に遠で　無用

やうい思はれるが平生疎闊な間に於て
は相互にその消息を報知する迄
の音信をする為に交通する以上の
はなかつたを寄附しかし俱に
る傳言は公務の使ひを喝
せねばならぬ場合に於て
て、平常通りの通信をさせる
する時は古い郵便を埋する名摩勝
の為に間つたかしてい、略令面倒な手
あるかかるべき事が

仕方がない無理して寄
すると、はじめ手紙
と云ふことになる。
大方の人民
自分の名が出ないと
来年からは出すまつたらう
で音信が全く絶えるの事出
書使ひ自己の使ひを明記
器いと書は
かるいとはまこと
手紙は面も何て物を言ふべき

てその間に如何
なる隔りがあるか時
に陶然思ひ切つた
言葉はなかつた長い封を
開いて見ると何かある
場合に出てもいゝ様な
がらつく今度思つた時
思へばきまりの悪い格好
をしてゐる事は云ふに
言はれぬ美しい又同じ
ものゝ中にも美しい程
度の親密の程合を思はず〳〵
嬉しく思ひ〳〵先づ
手紙を馬鹿〳〵する様な
考へを出すに当つて
〳〵ないねん〳〵て

その時に感じた
為

陶然酔せねばな
らぬ

てゝ
ものやうだが
書きたいことは
書きつくせず
に而り抜ひ用箋を切りたりて唯
てつたなく引きちぎつこゝ
てゝ切る為美しい又墨の
ほとりを面白
ほすことなく
一ちりも無く
よくよ見ぬよりまるの生意をもつて

高等二の心得をもつてすべきこと分強で
ある。かゝる事は一手間くで出来ない
いる家屋を二つ加へゆゝ敷が、ゆゝしき
家にて習慣とは何の造作もなく
くらべては、さらに風なぬ自覚も出
来ぬ。まことに善良なる習慣
は強く取つて強まる。一言不分
慣の出来である。

右原書札礼の意味、書翰文の
歴史、現時活格文の比較、将来の

趣旨等に就いて強迫すべきこと
の限つて居るが、いさか高尚に和歌
には必要から長つて仮名
いから、こゝには仮名文
とする。漢語漢字

◎年始状（長上陽に差し）

新年を迎へ謹んで先生の御清福を寿し奉り候

◎その二（五）

この和日の下に雲よ戦ける命

なるべく多くの治節定め

て別日を値するよう願ひ奉る

五六彎屋付〜御加書御也

如何候

◎その三（和風）

御兎も此方も恙なく壮健一家一門ことごとく揃
ひて今年たる新年を迎へ　此ご御同慶ん
存じ候
偖て本年は指く
去年の如く諸事中置く候御留守の兵合
戦今回の国若御家の兼て秋殺
山程て雌雄を決したる大覚悟今歌六時の
兼き陣計を開戦の號砲と共に逆茂木
いかにう構ふとも城門へ御突貫せしむべく
まし斯て白虎隊隊士と従行あら戦
大和の花と散るべく御侍取り極め討戦仕るべく

四 法増を殺す
ありがたき華燭の盛典は来年△日に
決まりて侍さん儀が指き有り難たく
儀も盛服出かけて式にて祝意を表すること
なく何か御祝の品を贈りたく思って
書き捨て趣向を凝らして居る最中である學
人は夥しき道に御物博覧会にて
師に儀よいつ過ぎて居るありて思
ひて居ておして天機で洩らしては
いざ盞を明けまするも肴に曲かな

◎在営中の舎弟を戒む

入営者の辛らいことは一言二言承知して公益に喜び勇んで行きしに非ずや、如何に僅に我が身を弱音を吐いて今更辛らいなどとは言はれん義理か、世が祖先を想ひ見よ。祖父の武勲は歴史の上にも仲時よりの誇り兼ねも明かなる事實なり。代々國を思って出せん。立てて我が家を汝の如き弱蟲で出しなりとあつては祖先の尊靈に對しても〜へ

土凶ぢゃあるまい。この位にして置かう。おかめさんおかめさんたまい。まことん因縁的なおかめさん。このおかめ氏りもは住は、この場合に於ける僕の心持を遠慮せず表はしておく。萬々歳也

◎雪景の繪と書ん

いかなる昔だ、僕は例の癇氣が起って困ること、の画の丸れ打ちに寒すり房を見ますへ居上に純粋な人物佐野の段からりつ在嵯峨で玉子酒に毎回の様な畫と見つけたよのおアバヨ

相濟まず雲と及者せらるゝ候ゆゑ
陣一三年陣二三年陣この陣に能く
せを出て申し訳し動の所不
思ものゝ怯懦の振舞とあるべからず候不
一

◎出産に附て

◎尾張徳川家弾正大納言殿御男子誕生の
儀ゝ暗ゝ申し新書刃一通慶事に
付い通◎つる君の事書こゝ御書に
年所の書簡は こゝん基礎を抜しん定め
て目ぐまーかるべ候 恐惶謹白

十ノ二十松屋製

2

◎新底の四位に成る
後で一書◎陣見舞に陸を遣して書
下の一度を拝け世ん四陸を出して
ども心を勝てこの上ども実天地に拝
忘ては農家のみい立あらべくすて
田園荒れ ちろ小生の和主は弾
い法望を捨て候の祖先の功いよ
して◎信中◎信長すん氏に
ば拝見の夢今日の夜天代の道学ん
よりて安堵 春日井

大変に農家に利益を与へられ
たる二六時中年年[illegible]まめに立
ち働き村收を蔵の米を[illegible]
倉庫に納栗ちてん[illegible]
基礎も堅固なれ[illegible]
田畑も生ずべ[illegible]
たる事のみならず[illegible]
その頃は[illegible]
小田[illegible]
は四五年前[illegible]

第二に其外農業に附属せる小工業は御先
代の遺産たる田畑を惜氣なく
開墾し[illegible]
遺業[illegible]
前代[illegible]士某の[illegible]
の遺命[illegible]
田畑の結果[illegible]
田地も無[illegible]
御自[illegible]
完[illegible]

せめーても基地の運動費ん借り出ん位
舞中の由まことん気すて手い得ら
ちが酒色ん砕きんが[illegible]だ、党派
めいありては大したことんもなだよでも政治
全の食い物とありては、かの東海中のん
庄らと吹く尾偏の爺[illegible]
[illegible]
てあるまい、かくそは名家の由[illegible]も
画がかん まことん把家ん法つて候
貴いても 係の利のめつ 基村の基基

郊の基のぬまも気保図際の任巡
んてても暮らす亮を届書し[illegible]明陰国母
てか小す[illegible]根のもと後
因縁が里を去りて東京に居る候が
倍ろ本国巡りしか[illegible]の張い家 木ド夜間
往来ん出でかよう身ん辻車に乗り
当かの管銭を得ん かつかん飾りつ元
自由[illegible] 数驚き巡かずから 紗方は
事ん候 元来路 法屋 もよのは無き子大
年無頼無し 氏の痕跡 ひかりの歳

家を起し初めて以来の危難に臨み一身を捨てて
かの義を守り人民を救ひ豊臣氏を
手なづけ政治上の意見を有し国家の[illegible]
大経綸を立て自己仕事を為すはかり
はかりの事なり[illegible]と思ふ人民
[illegible]人の思ひ嫁
而其人民を撫する所
[illegible]の[illegible]
家[illegible]を[illegible]
[illegible]

はこれ[illegible]の越人が秦人の肥瘠
見るが如く怪[illegible]
東国[illegible]
[illegible]時[illegible]
[illegible]
家康の性格
[illegible]
の力を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

病を療養小西こと麹屋の主人
なりつゞけおこる御自身陽の
あたゝ陣中中上らるも事意無下
の御用を思ひ成心外なる御つば
第一かゝる御体裁の上為ん御疎
相成ハ成御用ハ不
等閑無
うし一諸藩協を偉
業なる御成等
天主堂ハ如何堂に加盟
まいの方の望を揃て御事を思ひ
遂に慶喜ハ已に自ら進ん外
なる今や後悔ニ立不
落様そ炎問する世ハ
決意なる外国の
て意味の憤慨ひ
不安無なる一
今はなることて御
御座刻の面ハ

為に喜んで負ふべし　某私立大学及び
政治科卒業せしことなれば政治上の事
事の費用を出す者は代議士某氏とは
全く意見を同じうし且つ同氏の人
物の事とて爲めに金を費すると其人
てふ風に立て周旋せしまでにて実
権は某の理想とする政見の為め
と知りしのみならず某全く[illegible]
運の[illegible]なる[illegible]
いかなる[illegible]とも　わが[illegible]も[illegible]

ごさせく且つ広まりしことなれば[illegible]
されば今の世は某村の某すらは全く某候
補者の為めん結果を叩けども当
選でしかも晴天は種税軽減の[illegible]
策を提出して[illegible]
い成りても[illegible]て[illegible]
候の甘言[illegible]て御承知の如き[illegible]
い陥りたるにてそとは雷[illegible]の[illegible]
ことなれば[illegible]の[illegible]の区別を
為て御鑑識[illegible]の[illegible]んなる

と成分の同情と言やうなれば、恐縮千万に御座いつる、不日参上仕り、何卒御助勢を仰ぎたく存じ奉る。

◎長岡藩より

長岡藩は新潟に軍隊を繰り出し、会津藩と全く連絡し、大事を企て、其旨を接ぎて世に公表せんとの事なるべしと、思はれ申候。

◎阪長を殺す

赤と申人が、長きらなつて、今日西郷が来るの筈なれば、もう成るべく成るべく、定めて所言いたらう。僕も上京仕り、西郷と二の面会、阪長を殺す。

日二回と思ひ出せば、何の心ーいそ果さぬ面つ、又ーてふ此此方つ、孫さと命也られ、阪長ちは、色で出上いで、帰京の段、長を上す。

○学校に関係ある
山を四国を出し一時御上京後は
度の所様い御
御事業なるべく成り程なりか御
問合せの文学を御
校は高田専門学
ばなら学校官吏学
知人の居る
まの之方規約
学校の新

十松屋製

○京都
文官等学校の試験とても、さまで六
ヶ敷よん学生御度御合格
七月頃いと方
らとも御上京
三個月の事京
学校いの学生
之らと所御
ハ不中一安御

○妻を離縁なしとする

もしと頂くべたいと存じ申し候間
御縁女とする御思召
事賛成仕や目へつてもしと
いつまでもいつかの御氏の姿白ちう候が
ちいさやかなる美人にても嫁帰いて
し長く同棲するやうにあしかれ
とすることと思ふ
再び高とはいめて
西ちう喰野と申ちう俗は
よくく御留意
御

十文字松屋製

弟子俗より依頼がこの人まで
つは御子様の愛いと思はるちゆに
も御縁は御無意ちうこと
指ちう西坂と申御弥栄の聲者ちう
ちう。うすくは御知の所
さか者又は御
小て糟糠の妻と堂上
女房は成ず
不一

日蓮刻の

盛夏酷暑と雖も
何卒山路の二里丈
三ち様くらる
すると云たに
きたく存候に付
小たく様の人不日
上くる様い様
右まで上様
何こ
再ん申すること
渇想之様の事い存候
とと〳〵無言の事
砂砂の孤懐御内自分
言葉を仰
何卒御寛容一笑
更い詳細なる一書を
その先啓上
特具

十ノ二十 松屋製

38

一筆啓上仕候
過日は堂法師を以
手紙を以て
して東西奔走
京様方
吹ろは
り様間
陸ぶく
て
御同様下さ
この段御報
盛夏酷暑と雖
何卒山路の二里丈
三ち様くらる
すると云たに
きたく存候に付
小たく様の人不日
上くる様い様
右まで上様
何こ
再ん申すること
渇想之様の事い存候
とと〳〵無言の事
砂砂の孤懐御内自分
言葉を仰
何卒御寛容一笑
更い詳細なる一書を
その先啓上
特具

ご返翰

御申越の趣承知致し候 拙者
心計ては置くべき事乍ら近来出版界不
振の折柄或は六ケ敷かと存じ候へ共
みこと又は何分にしても労多くして
報いられ事少く候して面白き企画の仕事
に候はゞ小社にて他方面の御企画遂行致す
べしと思考いたし候如何
あまりの御無沙汰御機嫌の為にも宜
しく存候はゞ達て御健勝なれば幸

猶ん勝写を顧みず三ヶ月毎額の
報酬にて約し無理な程ぞ世間並の
事とはなく致し申すべく純文学
出版は遂に御苦労なから一寸御
手数相かけ候妻御面倒の上
述致し候

日本発行の

浮世宵日の間も偸みて花おひ百年の
齢を延ばして明日の日曜は幸ん
快晴ならばせめて朝早く幽鳥

の慶来大起らする中、荒川出雲守殿は
如何思もし御見聞か提し、勝手次
第か候儀に任せて御取計らふべきの
旨右通り
萩貝の御催し、御依頼にて下されん御
存意多御無は此方より申し出
と存じ候無おかけ無之御借い
てまかく仰に従い御相当の儀ご挨拶
へ道早く当地へ鮮鑑にたすく候

二　友の放蕩を戒む

ある朝朋友が用事あつて私の宿に訪問した
が、生憎の御不在で残念さうに
の所用にて外でもあるの様な話で
ゆくなかつた。私は近ごろ、花を折りに
気分が浮いて、さすが外泊はしないが
十日の中二三度は十二時一時頃までも
帰らぬことがあつて、その上おりおり怪げ
芸妓が無心に来るとか云ふ等をちらと聞
いたが、僕は従来君の品性を知り抜い

て居る事無論で信じたが
いかしいと思ひ下宿の主婦(をかみ)に尋ねるとど
うも家らしくもあつたが黙つて嘘
だらう嘘だらうと様にあの男はたの野
著天だが、[illegible]の和い江戸人ですと
と氣遣はないとうとう主婦を呼ませて宮
いて帰つたぬ、家嘘だらう嘘だらう
とうか信じて嘘だらうといは
ずに居ぶ〳〵明かたら今那来
〳〵居る所詳しくその達だらうと話す

○梅毒の死を悔む

此ごろ中々なかなかしとる言はれる由世を
御知り世を学りたい〳〵世の心ばへ〳〵
深いかをくらし伏し伏み伏いたる御所
症にこれらは俄に妙世を毒て陰ひけて
先日御文下さ[illegible]時に[illegible]ら桜御乗り
なきらし御世話[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ん[illegible]
こは[illegible]御こと[illegible]程遠ひ[illegible]
なりは何事を先[illegible]者をもすぐなる
差上しせめて[illegible]は御[illegible]末期の御床

の側に侍り又及ばずながら御面倒をも
の御手伝をもなすべき筈なれども
御世話なれば世に出でざる
御出家なれば家に住居し
ばかりは世なれば身の悔もなく
唯一筋に安心の極
意に上なし然れいつは食物にても何
方にまれ寄進御のみを以て
出世なれば世と仰ぎ奉り御
別に世と仰ぎ奉り
和尚の事にて
唐の船
[illegible]

南の宮殿にて仰せ
てはなりもせず
思ひ出し奉る日は
思ふに小心を戒め
こゝにて夢か現か
[illegible]
[illegible]
[illegible]

絵ハ侵雪夫の御月に候つぼ
ゆれの月の景ハ屋宅花洋ハ
の雲白ハ御臨終ハ
らん山ハ
ハ思ハ
夫ハ
ハ
ハ
の
い上ハ
て
ハ
ハ
ハ

この文を読んで思ひます御養蚕には何のことやらかいろ〳〵とくちがかゝりて女人方は何でも御しらのと思ひ始めて言へばさらに方金は帰山持て行くからの位言いたくもなかまひまもなく只今すぐ仰せ出されかゝる御用なるこの文は急い東京へ出ますがなるべくは急ぎて出ますと思つて居ます左様なら

十ノ二十 松屋製

追伸

○夜の文と前に申す通り御出しなさる雄蚕は作は薄人で特更に至極面白く雌蚕は黄色がつるまきしよないがこの蔵家の至文言いたて田舎見物多いにはいさかの信号する敵して新家他に聞つてはいはぬがもつと聞に明るいつまり田舎の方こと云ふ方なるべくは田舎臭く悪く固まつたすかの者〳〵自分の陽の方の他の依地のあこやらに思ふ更に切をすかは君の文は形上に載せる過ぎて居る一種の持色と言つば

言ってるからか、淋しくて有り難い特色でもある
理屈抜きで新しい男性美を強調
無俗な西洋二つん剃り、小古時代
語ったらぬことたが一種宿命の感を起すやめて
屠い型は芳醇さつぱりと博して新しく
男性自由やって見陸へ出来たる
ものこそ君の庫裏のもの小古文章と
新しやう云ふ事ではない此の無俗
な西二つん剃りの方と云ふべきではないか
新しい男の美形を促す 小敬

四月廿日 石を君へ

(二)

石の君が 吉小くうすく
い十日形の書は正い闇の傍なる
天竜浮かぶ小ぶ 方の会の
て 此の時 此の天 時間の道遥を辿り
人の霞こめたる平郎一帯 桜花は咲き
国を年ごと映の空 昔紅を待るがめ
まこと桜は書の 徽強に外たる何
会いの君と寄り ゆん 何のあり

樹々を拂ひ去る鶯の囀りの音に
吟かせられ君の美しい姿に
[illegible]最はんの石碑を今宵は
嘯して[illegible]なしに申す不便

(二)

今晩家に帰へれば今頃が待て居る
彼女は皆見廻りに出て居る君の身の上を
案じ始めて[illegible]方つまり
りしやと言ふ[illegible]
[illegible]て或多の人に案じの問ひ

(12)

ゲーテの「ウエルテル」の首章に曰く慢
は迷蒙の基なりと[illegible]
考へ見ることは[illegible]
(三)
[illegible]今日よりの無憂樹の下に[illegible]
大脱解[illegible]
家を上[illegible]
い[illegible]
野の[illegible]
[illegible]は[illegible]

かう十里の長堤、性ちがの見た人の昂も
いけかたる力氣に重て開かれ迄ゆられ候
花を見ることかまかり成を皆いん
くらの感想のみけば早くもかられ上げて
婦人は白帝の三日の夜て一杯を傾け
秋霜の頃既より雨つゝ京を移り候
げに、、くらをたを朧の月夜まこと
と春半朝に沈り候帰途は女子
酔を帯ひて、この手紙を認めけが神
経鋭敏なる君なれはゆゆん君の面者

ゆめ〳〵と導き出さるゝと存候

(四)

君よりは打絶えて御音信なく候へ
ば如何なる第一届の男はーかゝ御かと
思ひ居候に日義の書さし出し
て事由聞き小生は近況を報ず
やうなれば田山に帰臥候君の考案
を賛せる組中不たも片おりにて完
成致候間信するいい男なるあまりん張
合なき様思ひ候、、、ここまで書

一時郵便の郵便を領収する一週間
前の手紙 彼女の手書きの書物 故小生は
こゝ前言を取り消す 夫業を去り
信仰が之 彼の性格 信じ 隙に富める
を尊重の為 感じ 也小説 地位 拘束する
ものに得 無強 全時の 同情 御注
意あり なる 彼女は こゝを 行く 丈 なる
小説 今日 当病 の婦 人 之 寄
らず しこの 得 御 の 修飾 を 交 ず
して 出 そは 意 性 を 自白 すべ 彼女

言葉 わは さ から 見 ら異 なず
異 又 彼女 は 遥 の 対象 で
友 として 交 る 重 慧 し 神 識
として 有する 好 個 の 婦 人 と 初 ん
彼女 は 彼 の 屋 様 ら 負 かさ る 他
四 御 渇 見 物 ん 待 る
社 待 の 出 集 ら て る 御 渇 の 花 咲 る
吹 と 指 ら 得 大 久 保 は ち と り 評 判
性 は あ け 人 も 新 の 海 物 意 考 す
ロ を 見 て 前 日 一 越 い 自 ス ら 十

社ちをを立逢し清国の情況の悲しん俗歴を
陸ゝ義面白のくゝ過御報告の概略
お近し御日報場はすちく候

○本道の
亂書状種々越陸する身は至移の移り行
くを知る御手紙により考察吹き
陸する所の景を心苦い思い候へ候
待候一方超成紙上を修の事候
郵の時候也を失ひ者を出でそ
くり山の手紙も借る方便宜
お幸酌分々

十ノ二十松屋製

四帰朝の船ゆく
紙軌の里西比利
亞の曠野を横絶し西盟好徳に着
せしまその見聞は
事始前て付郵船
をくこの船乗くら後
一千九百九十年
二千百年以上時
経い年りしみん前
りておい所のり申
候長崎
上海行の船

と話す行の船とは殊に昨日出発し
延引せり午後
[illegible]
[illegible]
[illegible]

崎まで五十時間航海する由なれば
後二十四日の午後三時頃には長崎の埠
頭に着船の人々と握手することゝ
なれば今日まで
別れ別れの長崎に帰
着なるべし
一年間
我が国の家庭の
帰り仕事は始
めて難儀なれど
一年間
こゝに
居たる外の連
動は殊に出来
自身も御
健康は必ず

如危惧なることゝ
思へども一年間
裏で彩り
の際に帰郷
生活に
なる忠告
十分の
に
二日
の事を
宮殿
(三月二十二日午後
を航行中)

昼食を下へ置きたる後一時間を経
て夕時時頃より微雨を帯び
たれば船はかの〻〻運転を弛めて一分
ごとに汽笛を鳴らしつゝ運行
したり 僅の
夕食は七時半頃
中僅この日の朝晝兩食ともすべて船
にて為すべきものなれば船長一の手
客たるを以て二十一人は相庭に賑ひ
たるいとう 夕の晩餐は八時半に
終る

家族室客室なるべきを以て僅に五人を客
人を食堂の中央船長その左右を二人
の家族室人にて占め ちまち結
構なる洋食を味ひ船長は相
て既に美酒を傾くも性来寡默
の人なれば多くは語らず 船の左右その
毎回宿の外 何の
意味に於て同じ 文字通りの
ものなれば 夜の
笛の響いつゝ 静けさ眠の

測い船の中。

今朝起稿し、
平の雲は全く消
西南の空は黒雲
し紅霞の捨てる程
時平均十四ノット
船腹らしく
出で時
時限ら起き出で
長崎に帰らんとする

昨夜に立てば星
海も穏やかなる海天
雲は海
てはなく
船は
弱風
今朝は六時半
車ゆん
碧は
甚だ
豊日にうたい用まる

らんと欲ひつゝ
海苔の如くに
の船は
と申女
十六十
るも
代りに
足を
長さ百四十尺

みつ
一つは
甲板
時間
時
倍車
つゝ
甲板上
陸の

間もなく同行者を助定に伴かえ
た所を眺めて好時は同じ甲板の船客
にて強で相手にかけ面白き足袋
力士に一理位の勝の点は生来僅かに
は何にも一人きりにて何にも張合な
き事に終始致候
あい並べて西洋人
の客は何にかけ合日にかけ
は勝負書も会事に会堂にいつ
し経長とにもとに出お二人に候
尾勝は英国にて第一の主婦に花

て詳しく旅の模様を伺へ
拙宅にて夕食
夕方にて拙宅に
外出致ところ対
は安なる変こと見せられて候
とすることなく何候
此方にて両港を出て
候も海路の半を過ぎて東印度
なる戦場さしかかり候横陵島は
東南約二十海里の所に御座

夢のごとく霧の彼方に現はれ候
対馬海峡は今朝の霧にて昨朝肥
前沿岸遠の陸地を望みしことも
有り候
波平らかなる海上にては未だ昨一昨日
と大差無候矢張こは因果にて候
洋を眺める時いはん日と何の船も全く
如ことなく又無線電信を以て絶えず
他と通じ報知を受ける所も平均
毎日五六隻通ずるのみ
英国海岸近

つけば屋根瓦の船陸い水雷の艇
と間遠つらす達降漁船の跡をなす
ものなるを知る成程達つて左右
いと国府内に感じ得なかりし昨朝つけ
て数年ぶりなる日二十二日午後二時
頃玉璃陸島沖に投錨
(三)
各部上陸の準備を調つて多分の
俗間之ものに重ねべこを載せ
候ことこそ小さが海外最後の通信

まつ傳
今は愛宕山峠茶屋の口を相撲の中いかりて脱
ゝ傳昨朝から暖房の中
下半身たゞ伊勢の暮れ相撲の
和歌山の庶民の
相撲は白熱の取り出して居
相撲は男子の遊戯
女子のみ専門
男子は偏敷附近の住
むわらべ日本にて得る厚服のも
ゝらは緑色のつるんの服を着
みこみを着るも必ずみなゆき
ゆびしゃ

ツを下ろすこと傳近い北部の
いては学服なるを特殊の服を
人数多く傳
日本の世界中
日本の相撲
い無かりしたるは傳国の王人の
元良住中
比較して引き
力をは強く
方の左を取
良に交てい

そのあとし家にて来て西洋のんびり
でおりしら小屋にて
思はずかはに燈
今日は日本晴の母天高にてかこる情
和にて快活なる日和を見ることは此旅
胃腸業はじめてにて燈台見る
年にて南より吹き来る無邊のなは紺
青の色を湛へて
海はなぎ静穏なる
今日も東の方には肥前

二州の山脈のみを見る西の方には松浦
平戸九人との大島小崎
時時の 海峡迫るあり見えけり
青のしは宮崎県
しら壁英国の矢山か赤稲々の山麓
を遠慮なく新
緑にては まことに雪壁の美景あり
中すぐる
しかし伝説
とては無中小で
一人ぼっちの相手
相客ず 松浦

と申候て強而御すゝめ之事に御座候
船長の強い勧めに二時に長崎に着く
と申候今より少時間の後中そのの事
一回の洋行はこれ迄日出たる日を拾
ゝ候
昔船泊所電報
この年月ゝも無論なり前に御覧
に相成る事なれ共今朝出
船つゝ
ゝこそ
ゝの移居に行かうと考へ
ゝ候

十ノ二十 松屋製

新聞紙にて強め此等三四の牛肉は御所の事
寄宿の者共 兄に御見せ下さゝ
ゝ候
少わけ上ゝよりも今一度かくこと
は明日
拝啓之如かゝ
敬不具 弘すること
度の任来を祈り
ゝ候最後に時節柄
ゝ自
ゝ寄り候
ゝ日三十四日午
前十時出洋航行中

留守居を頼む
ゝを思い付いて
ゝ
ゝて上元の温
ゝ
ゝ
ゝ

つ日の日は特殊事の為に就いて
庭内あまり無人に因し幸いに家人の
へも此りあり是非この間来て居て世
話いたし物移合あらば すぐん事
を呉れとの事 然る日の模様 何とか
別に変はる

十ノ二十 松屋製

四 拙文サマとこの度
特殊 出来 定下の近世に対して聊
情ずるもの 与已 加い 夜 心より変
愛する 在前以来 日的 時の古言
こは 成せ まい 俗 加 定下 はい
く 之 法 ず 加 ず 疑 文 を 宣 告 せ ら れ
いと 与 と 変 ん 已 む を 得 ず 時 事 俗 へ
ば 仰 の ま ら 今 日 に 今 日 より 手 を 分 ち て
俗 だ い 屈 拙 の 内 様 と し て 定 下 の 迷 夢 の
一 日 も 早 く 醒 め る こ と を 望 む 者

東上仕候ハ、一七日ハ不可不
常行所の人とても不懷足下の
事を忘れ小さる此の度の事
ことを嘆望なれ伸ばし
○陸軍の成績を祈る
たい喜び候へ共無論乃ち
僕も嬉敷ハ申して
し偏に君の御蔭と
僕等伸

○右の近況を聞
小生ハ昨日起居
弱りし 野を病
へ居らるれ中 修
心配さる 殆ん
病ではなきかと
て成り難く 早速
を伴ひ 行く
少なき 異
年病 三年

先強て書中を以て御伺い
候

の方面の
無事安心の時の志を知らるゝは
十年の心知なり。書又何つゝ
なりなり書居外国
たらずゝ少なりなりつゝ
心配か苦悩する大船の引書は来
不多候間書居
候間書居
密に御伺候

十ノ二十 松屋製

○横浜の人に報す

横浜の人に報す
[illegible]
より貴御志御伺申上ゝ
却て五年〳〵御知
覚[illegible]
御伺は先ゝ
御佳境[illegible]
[illegible]
[illegible]

い一株線を空間に引きてをりとも
その花の美しさを
今年の二月の
私はそれを前に
桜の花の美しさ
桜樹を指す
桜樹の一つに二
も遠へ
さてその
三つの鉢植を
山をくるとき
一つ家を
さらば
その
我が居る家の周囲の景色を
大美
その一つ家の南向の
窓は
家にて
この
今

桜樹
その
つは
にし
単調を
居る
の
桜樹
南
夫に
仕
言はで
も
芙蓉の
雪峰
似
時
片
桜
樹
の
傍
に
寄
が
ら
り
桜
樹
を
近
く
に
見
て
桜
を
眺
め
て
居
る
こと
は
毎
日
の
如
く
の
名
強い
仲
が
も
んで
居
る
人
の
みを
山
石
かの
あ
を
山
を
過
ること
なく
風
向
の
変
者
も
が
名
残
る
を
過
を
降
る
桜
樹
を
ながら
不
景
の
如
く
の
雪
の
過
い
居
を
見
る

の部を見る少し
は実に絶壁中
宗不可比の
はるか
公と野の
辺を
の
如く
は
書
実
張
り
ば中
麓
に
は
書
が
舟
に
の
物
に
ば
陽
に
は
舟
先
に
立
て
水
ば
陽
に
は
舟
先
に
立
て
水
の
物
に
ば
陽
に
は
舟
先
に
立
て
水
の
物
に
ば
陽
に
は
舟
先
に
立
て
水
の
物
に

霧ふかく物すごく樹木は俄に立籠め
一閃燈の如く雷鳴轟き出で
つゝ雷雨轟き出で孤山の名たる
雨脚は篠の如く立籠めたる
く時ならぬ雲来たり来る時を報
ずば光を出さんとする四山雲煙いよ
/
沈んで天地の峰の空はも
剣の如く虹の橋を
又又以上は手紙を印つる
ばかりなり 宮前の印
月桂の峰の陽境なるは
光が法用印 印伝の田戦いること
ふい明屋を使ふ
は山村水郎の間
自身の義兄
三程 お指し
ば 御放念
強い指さすは兄が道の達を厭はず
すの芝鞋い出発
強はる一年
月桂の峰の陽境なるは
光が法用印 印伝の田戦いること
ふい明屋を使ふ
は山村水郎の間
自身の義兄
三程 お指し
ば 御放念
強い指さすは兄が道の達を厭はず
すの芝鞋い出発
強はる一年
一種の神秘を含の

[illegible]の景観は[illegible]
[illegible]に[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]

何卒 [illegible] 狂句少々手拍子
さすがに 芭蕉の俳諧の問い 新しく煩
相は 金ケ崎兄 御同伴の筋 御伺 歳末
もて 御 [illegible] 兄 御
出 [illegible] 如 [illegible]
ひまを [illegible] 御 [illegible]
御田 [illegible] 句
[illegible] 御
[illegible] 年 [illegible] 兄の [illegible]
[illegible] 一段の [illegible] 御 [illegible] 候

十ノ二十 松屋製

[illegible] 御
[illegible] 芭蕉 [illegible] 御 [illegible] 宮の
[illegible] 御方 [illegible] 拙 [illegible]
[illegible] 日 [illegible] 十分 信用 [illegible]
[illegible] 宮の [illegible] 御 [illegible]
て [illegible] 御法 [illegible]
ります [illegible] 兄 [illegible] 念の [illegible]
一 [illegible] 御 [illegible] 御 [illegible] 上

歳

遠く御送金下さいまして誠ひます
扨一分の御手紙がありまして
どうぞ明けて御開ありまして
此方へ帰りて十分御協議
こうを願ひます。

○ここに
雑費年月日付を以て金△△圓△△
銭也の御知らせ
に付き旨御通信
接受致三拝見

扨御知らせ
逆かうの所
ものの所に
生徒来数
自分の勢
いとなる
の上三島
れく
御相談
僧侶
で書物

僧侶の知らせ
ら仕方
生徒来数
位にて
体物を
御逆合
方御所
第四
書意を
死を祈ず

○の君様へは手紙△の先生の訳
を聞かせあるよう先生はこの月初の中は
ふるつかう見ますから小供よりの先生は実家
三人の方絶えて我が僕の病院の宮ほのぼん
ひかり出ぬ僕の手を執られ
時の先日みまいなる此僕の手を執られ
すべて特い眼目でもあり小供春恩二郎は
白髪有之陸つかの不ひて嬉御堂内
は時々ある薬婦と僕と二人きりん
供ひて居る陸婦と起前とくく文

高原の駅員を呼ぶ叫ぶ時暗闇の
生事事い僕元先生その死はまこと哀うん
候ひて大変の路程もかくれん田中島
りん僕時々すがわ山島ちゃ
ふ僕は事孤ん信ひ一先生多
苦い所侍ひて書物の水とまみて僕
よは僕一人仕僕ひ方法先生の思
海岸比ちゃ方先生所のんか
見この事求ぶ言ん正ず僕ぐ
何ちゃ里程の貳分も種ちゃ地

七月二日の二発は、長野県松本市を中心とする地方に強い地震を起す

一

この地震は、スレート屋根の瓦を落すほどの地震で、はげしいものは、立ち上がれないほどであった。時は夕方の暗くなる時であった。雲は、西の空から、黒い雲が、ものすごい勢で、流れて来た。山の中腹の、樹の葉は、ひらひらと、風に、ふるえていた。

霧を破る息づかひ音聞こえ候
時一度の陽なり 雲の樹間は唯だ一
面の暁輝 さながら斷くかめく湯本出
し候 夢の折れば無為まし
を祝ひ合ふ 雨は降り出でぬ 海は
長く候
ひはるの障書に疲れ眼は二重美
しき夜の景色に接する心
はこの時 淋かに候 誰かは夏の日
を厭ふ 誰かは我が夏を惜

しきとなつかや自然のものは偽れ世間に偽あ
らず候よ

(三)

(光)

子供の歌 文も言はずに池ゆく鳥
一村を霞の煙を破てさし上る
月の色 夕暮一さきは焼る我が家の
道 かがや彼方に光り 打連れて行く
漁の家 ゆかしと出て寄る老若男女或
は長き或は低き 窓を地上に出すて
海風に吹はるる間こかるはあ

の子供の小兄の[illegible]歌さては荒きが
鄙独の庫[illegible]なん他
健康と修養とを修練する事の大
気は金銭に強より書の[illegible]いて
如き小て天地こん浄化一書一代
[illegible]村は[illegible]の土塔の上い立て玉の
如き水[illegible]なかめ[illegible]ける[illegible]を[illegible]二人あ
天の園の如き[illegible]村の美を[illegible]の[illegible]人は女
[illegible]増ゆ新しき男と[illegible]女[illegible]の[illegible]
[illegible]

つて彼等の間の
祈り供よ。

（三）

こゝの秋のしづけさは四辺を包む
空ちらげちる陸の[illegible]月彩夜の時の
[illegible]のあを[illegible]初めて霧に洞[illegible]る木
立を踏[illegible]すると[illegible]ばさながら黄昏の国よ
り帰りたる心地いとゝ[illegible]
[illegible]月い[illegible]は[illegible]楊
い影ひき時ちすゝ女とゝ切豆[illegible]

濁酒一瓶いとう豊かなる俳士あるべしらば水も清江に毋呼べん明月を弄する
秋へもあるべしらば

山水は鳴り響いて琴を弄して跡樓の造に立ち
そこを去りあつぶ高砂の風露いとなげもつて
家ゆゆしいの古男来りしまるまでてゆかつし
俳時なしに土時なに俳句の句にまれ
枕を向引しるか川はとうとう知時鈴
蛙し 秋山人を強し 鮎を乞
大の高味なるやい覚えは如何なる句か自ら
らず俳

十ノ二十松屋製

72

海道より

今一世界白河青松の間
萬里の大海ゆゆき来る風を見れいしめて
自在に遊ぶ楽は何物に接し俳句
蕉陰多し庵俗の庵の条件なし拙方い
い俳小生居心中何なる思ひとこと之なり
の方教へ対 魂の石越すること笑を俳句
はいまだ未長一 活 魂から小なりも形い俳
ひ活岩窟に指して 君を思ひこと小生 蕉
相見ずば扇角忘却ひ心中の煩悩は

なる小樓の棚蕉小屋

西埜さんも危まれ候。御手紙はもう六月頃まで
ゆくと強いてとゞめまして其の上又小生の方へ利
用する筈の事なれども、絶えずさらさらと切望い
たし候。先は唯だ遠去を忘れぬ。ひん殿様
の居り候のこゝまでも御の時、姓名を
い思ひでるに外面の明るきに月の上に
燈いでや立ちより月夜の海を眺め嶺
碧い立つて出清一番明日の雅念を寄
げて吐き書きまを初下候。

十ノ二十松屋製

13

○事業の中止御知

御手紙は拝見致し候。大阪御石屋町
に於いては微力のみ能わず限に移て書
御話は居り候。実は右中止する様
いたしの御詞さながら孤ひつまり小生は
一人ぼちん者なれば今日三方の一
を修すべ今一度いろいろ拙子の方
は〻〻拙子の方へ引き取るまを先に
わたくしも草庵へ接せしまゝ張度
4萬い供ぶんは御の御手紙を一通 七月時

その母の親なるかい心感じ再度する。なんと
涙を涙が流れ流れ涙の涙を涙を
夫夫の恩情の恩に報ゆる年間の努力は
なかなかなかなかなかの御手紙は
無論無論酸に感せられ中此
よりなかはいつにても御留
なかなかなかなかな

丈地い編路する。左程者んともぬかり
い有り神経の純まことん、御恥か
しく俗ずかしい竹島の交宿を自
分の小ぶたいい一部一稲ん日に相隔り
俗をこの情米から生を御見
指ずつ世ってはいたん家せて御
御紅況御報知下さいまたくいえば又
者兄の御成業をも日夕神に伸ん祈り
申ます俗乃書

追想

7小

四上京後の感想を友に

小さい時から詩ひ学ぶ所なかり東
京の繁華に居ながら別段の事もなく
が古家屋つ者りて却て心数ーて
結ん三百かって混乱した分百
も付りたらいも東京に於ける下宿屋
生活を離逆やうと筆は執つたが
さて一概ん簡単ん延べることも出来ぬ
仕方ないから手近い所乃ものやう。こは
牛込の早稲田ん近く永二原てまびは行ぬ

下宿と来て居る――知人が僕のめん前が
選定して選んで居る人なのだ――四畳半
で同代が三円宅が三円宅は
隣室の方へ出る間の仕切りは西洋式
同じく一つの間の理想的
だ。家賃は安い天井は情け容
は神仏なれども知らず一種の
幽らみ一種の
長寿が出来ない隣室する方がめく遠せら
人の[illegible]とする御室の人は仏蘭
のめら顔見る物いはまゝ
[illegible]

い掛込のうんかやうだ。また学校が近
まりのあるのこと。ともに寝ころ
人なれば産の間にぶらぶらして居る
性に陽明の寝室
ようが人と仕らぬ
て居る中の半間の
下宿屋の室に対
の形を室が壁を吐
る音の聞こえ
の長さ五男で
[illegible]

如何程苦いことを堪へて保護する。まことに感謝の外なし。
で今日又小荷物の通信を送り
食物の通信を待ちて居ります。
又小荷物も頼ハ日の九を過ぎ
下宿屋の女中が取
いたす。早々

無遠慮

十ノ二十松屋製

○吉岡先生八歩ふ二ヶ三箇
所御仰に成時分は御近所で日毎
日待ひ居ります。小荷物へ通学して居ます
ちが子を強別書長官の間全く御
便を解かず いをれん 給事下宿して居ます
たが次次人の外 東北部は中学御
年書の仕る者の学の術を修業して
といふ孫子で御里を出られ勤働して
是迄も書を買徹一やうと御院
心ひ 年年二月御上京なさるや 思や

毎日早朝[illegible]に対面配達をしてゐる
延学校へ行通学致さ度と思ひ
居りましたところ、まことに感服の至りです
は紙の暖簾なる自分からも
で家の境遇に同情を寄せて居た様で
あつたから、[illegible]日お世話になりいろ〳〵
新聞の客たるに拘らず一片の書面知らぬ
新人迎こまれて何とも御気の毒なもの
のは、とうたりよりか、いまゝか御迎で
ハ有ります。松は世間の事に深く感ぜ
ず

十ノ二十松屋製

(2)

[illegible]ましたが全く他者学
[illegible]の熱事で皆傍
て[illegible]学問をなやうもとゝいふことは百事
同情を待つがゆく到底ちよふ様ふは成
らずまして一年二年といふ中にはいつ
しか新聞の発達[illegible]日長門生活
しかしては学業も捨て無形の仕士
や[illegible]なる[illegible]なるに新聞の[illegible]
もハたゝ学生に代りまして[illegible]は、[illegible]
ゝとより、[illegible]ひ事有ります。まゝ

前車の轍を踏まん鑑みてあるべきの事を深
く御考へなされたく蟻屋久一郎
様にても新伸如何明るべく成るかも
石橋を敲いて渡る格にて安全なる道節
を守り注意なされ御出発あらん
御無事学業小生ことを希望致居
候微力の私にも出来る事があり
ましたら御援助致すべく
陳上 御遠慮なく仰せ下さいませ
小生 御伺の上 早々申上げます

十ノ二十松屋製

すが、この手紙を差上げますもし御迷惑
なものでしたら御遠慮なく
御白

思

の方面
彩の精神深く思み作なく特に
秋晴の思ひなる わかる時は
なる御親切なる御手紙に接し骨肉
い御や 帰りの御友情 上陸
地に拝するみは 思ひ
ず涙をさそ 孤
小生 御出発の 中学時

代より農業を志望致し候前年卒業
仕候はゝ直ち家業に取掛り
そと農作に学ぶまゝ進まむ事望み
かねかねより一家兄弟に
話致し
公民学校へ差問ひ相談
其日田中始めより西
中に生業に三年間学ぶは
手ぬる御異論ありし
前の屋敷は生産相属一
体の上出来同様
仕り候へども家の
内外事情出来仕り

十ノ二十松屋製

カ
カの知識を便んむ事基礎学社の
研究に成り
校に通学し此儀は△△英法学
学校の上去る月言葉
の学問を学ぶ度愛もう
カ
カ
カ

手紙を書て遣却致申　御先生
掌△△様の
△△様より
△△様より
お報の通り
ハ高い
寄宿する
ん後は
御話致し
思ひ
他事から

十ノ二十松屋製

上

が御先生の事は
居り寄月達上に
住所を知り
ん遣
と特
る其時の
御懐
ものと
御恩寄

知致
御
御
御

遺書

信をいてじゃらしく相成候間
再以は時者の変情を深めん結束
一筆仕一つ者り申上候ものなれども
上に於ては後に先生の
古文の躍色に従て御教示を仰ぐ
して有候得共来年中御
勤学をつとめ由者御の主旨仕蒼生
蒼生民に対し恒宜敬し且つ客を愛し
の第に和らぎ信御孤の困にて無之
御嘆息仕候ば御世に知らるることも
暮迄に先生御逝去御遺書山況御龍

三宮宮の年賀を祝ス

毎歌府まをいい収とりつゝ
まとり以下文でろ
書は明日正月午
仮書ぬ書類
一人にて
修故 大急にて
せもては三月の一
無事宮字神は
御好物の鰻飯

今朝屋用事あるとて行かぬといふ所の希望この上なくしかれども分の時出まゝ
唐上御願して出来ずに御助力
たのみつゝ御助走はなでもよろしく
と性だ時分の承知する位置に於て
ナ分なるを望みの所

人を頼みて
確証一通は久留米湾の段御情なきを
告げ過日の逆縁の石を
年内対太田雷三と
見し修行同人は
兵学校の年業弱
せ今西海軍大学校の
けられまことに情来
校に御祝儀
等を起年する
相手に

其文意を体し
当方の作品を変
軍事用に変
見て在京中
二回位つゝ持参
を要せを由
煩雑に相成
み門弟
を載せ〜

弘文堂に従来
家健間屋
宣しく申し
書面の門
意を見し
怒宮なる他指示
の結成
まず修間
ひもの他い
一杯他の

十ノ二十 松屋製

新しく出講指書
なく何分の
を応報する
より年人富志の上
いま其方の
敷布
大体面前の
上に他いつ不忠
の上事情申上
御回報時

い接し
の事申し
最保
小生まで申し
上ん書面の
の中右他間
行小生目下忌引
書面に他
他特映
上ぐべく他
御成他

早く

◎停車場の待合室へ到着
昨日御伺ひ致し置き候
所の元乗りて
知りて居ど
昨夜者も
の夜
山生
すず
いて御待ち申すべく

十ノ二十 松屋製

十月廿三日

◎相地庫者の方に
弱い収ーら冒頭
富陽の弟子地庫
四ひ東新涼郎塩
いまだ直ちなつて収
しといたいがまこと
ら脳無つて◎全ら知らぬ 僕には不思
議で成り返 萬事
厚く 謝者 荷ら
ひらうまして土地が通やぬのか

東京は　も知らぬ国強鎌倉とて女
は　もとより　書きちがえの　由よ金ム俗了
し　宝来地方　苦すく　猶以て　来たとも
安堵　そんなつきかへ　分州は　わいなつて
人もあらうか　分倹も　廉し　長三　留ん
は　持て　来たとの　位　幸い　僕の　知つて
居る　孝の　小陽ん　在　居る　孝の　才へ　出かけ
ちゃ　美かりそうと　僕　孝へ　つゞが　ゆくの
早く　年　快して　帰て　来ちゃん　僕
はかりか　家の　健　海　い　渦　強　へ　居

る　書　北　孝　も　孝　ちゃ　ちゃ　び　ん　の　強　で　の
る　運　動　相　孝　方　面　て　居　る　孝　水　強
場　牡　ち　い　ひ　姫　へ　夫　敬　の
る　新　聞　社　の　婚　情　孝　ん
天　地　の　宝　表　は　安　定　き　ち　ん
て　こ　の　宝　記　ち　ム　は　さ　か　ら　強　者
の　く　心　地　冷　跳　た　る　べ　ら　似　刻　下　の　小
な　恰　も　ち　陵　地　に　在　ち　ち　し　ム　の　地
作　に　百　御　加　る　べ　す　る　の　高　は　面　ち
直　さ　ず　ち　境　地　の　表　み　出　し　た　ち　ん　似

経面三度別封
日曜附録の便の事を成し居はと説
外の事は後日

○分間の面白
事所の傳も昨日迄御留
中上くつと度小生の不文
書ばかりの高を
書ばかりなる掛合
上海携帯世
事り能
時い時
絶笑い傳し
○御傳
今日は他い
○三あり傳間明卯の時
ごいたす

十ノ二十松屋製

○貴府に御
以せるも久しく御無沙汰
相事ず御豆面
小伝記事西京
こしたが何の面
借用事が欲
拝事有り美
ゆえに貴府
元間に合せ
者ども

支出

○御伝構です
行ん
白ことあります
煙草
そこで昨日の日
山の
ならば
この
この
事で

ちかく　その日まで山つ[illegible]人をあれ
ぬやうんさびしくゆき申し仕はせ置きます
をこそ日をきめて家ちかく同勢は僕
の一家六人料理番
を受け合ひ
の俗りあいから　家の弟妹を連れ
て御出かけ　ただ
その時は以
日日新聞の十二月号
まで出ます　ひまつ左様なら

十ノ二十　松屋製

の方面の
外国の新聞をみらつしたが
特別面白いことも
し箱崎に南国
姿の
でそこらを帰
ばまで
はうと思ひ
失敗
とん清

去年の十五夜に見あげた月
達ひはなかつた。仰ぎ
見る人の心は西へ西へと傾
行かうとする方向に
傾いて行くのだから
人よりも先に物は言はず
ぞろぞろと行くのを見つかりさう
だ。昨晩は小達に向り揃へ
無意味な中秋十五夜
葬式は神屋

□子を喪ひ
て
平素親しい花
見に出かけ
り
夜へ空しく無
人住居
いつ
運命
持へ
共すべく
予期
□子を喪ひて
平素親しい花見に出かけ
夜へ空しく無
人住居
いつ
運命
持へ
共すべく
予期

さすがこれも愛妻の
ものを持てる身のい
とゝ思ひやられて面
白くかつ史実に出
隆言海

■西郷隆盛
綱の様に強い酸の物を固くもちゆ
生る如く西郷の如き人物
心得 立派な英雄 薩摩中と
ゆきつゝ仲 この仲は是非こん約束
四人とゝ仲

十ノ二十 松屋製

実は
此の明治の全盛西郷隆盛
の脳の全部西郷師の脳合軍 不言寂
到一 [illegible] 尽くび [illegible] 家を
写生 例さ小説かり [illegible] 剛家の明 [illegible]
心 [illegible] が今朝 [illegible] ちりと歩 [illegible] から
りと話小説 [illegible] 強 [illegible] の思ひ [illegible] 得
解 [illegible] 男剛 [illegible] 根 [illegible] 彼小
み他い [illegible] 大 [illegible] こと [illegible] 小
逆薩の [illegible] 崖の上 [illegible] 約束 [illegible] 変
もこと [illegible] 推安 [illegible] 修 [illegible] が [illegible] 何

いや有り難つず御見舞申し上げ候

○お亀の

早速の御見舞無有り難しこにては

長てもすぐ海清敬神の所にゆくつも

りなりしが今朝見人ばかり

ゆく途中ひとりしが二三枚所にて位別の事なく

御安心下さいたち候 近所にては噂

皆のかずまことに安からずねし候

草々

十ノ二十 松屋製

○杜海草の花咲

いつぞや御来の節の品是非一株もと御所

望ありし杜海草八ほうしく咲き出

候ゆえ前から用意して鉢植にいたし

御しに皆接ぎ合いたち候 杜海

草は昨年出でたる芽の姿さながら渡

せて丸い株つける人に似たる強に

枝ありまん候 一株の花に数り

○名あり

石燈籠の下一面に菊の花咲出

園の風 秋出でん藤 相変る

一日の

御手紙拝読致候
かしこ　この花に御
はは候はゝ申御意
何卒御
○開店を祝す
御兄
御書状
御
閑業
時
御
品
十ノ二十松屋製

92

四結

三

○病める友に思ふ

今日遊中少食妹い遠つた
君はまだ臥て居ること
は単に砂肺か悪いと
らう　按ずるに君の砂肺は
人女で臥て直さうと
ゆ彈は可まいと思
リ小手いろ〳〵する
手などへ配一遍ぜて
手は僕も薩摩から

心配して感ずるあまり
小説家まで問答
てゐるうちに折角の心配も
病気を案ずるあまり
心配する方が
感ずるやうに仕せること
をしてゐるかと知れぬが
私に任すがよ
敵陣を病めん
家を出て思の骨頂
は一切念頭に無くて僕の心を
慰めうとするに
いつまでも言ってもも
不敏は男子の面目
せよ小事にくよくよ
量を上げて新
私は聞く。家も色
紙に絵を描き
いや人に見せつ
家位は一面に
は一切念頭に無くて僕の心を
慰めうとするに
いつまでも言ってもも
不敏は男子の面目
せよ小事にくよくよ
量を上げて新
私は聞く。家も色
紙に絵を描き
いや人に見せつ
家位は一面に

みなめでたく思ひなされ
飯森忠吉方へ
○在宅をたのむ
まことに中僧なれど非常の御無理は
相変らずか情に明日大久保方へ仏用の事
なれど差上げるべき筈二時半頃十四時
いなられば用事なれば来るいのだん
思ひて安心へ別の用事はなしが久間も敬
上に久しぶりに一五郎
の車御在宅をたのみ
たはなはだ

○松蔵を時分小僧
しめかける秋の書を一箱の包
を開くよりも先に茶
を飲むとそこに弥の方に
僧侶君に宮殿する月の代さま
御つらんよりて中つぎ上用の法
味を頂きたる達磨三杯の手
僧父は接客して酒の肴
小生は飯に九分の
珍味に古鼓を

張て力所へ合はせる様の事有て其
お角の御存意に背き譚方御仕
分を独りを限り御仕向に成り
はお御強の意有り成り侯先
上り侯

○ 功を焦る

御年御年は御史を
勉強なさるとて
川のはし火ばちは四
御はし格の御せとら
とおきなさるる為の後
（元たま（松島製十六）御仕

先
史
の
御
強
い
勉
強
で
帰
つ
て
来
て
が
ま
す
と
明
日
を
見
て
個
借
書
を
す
る
と
の
如
く
人
呼
く
ら
て
角
が
立
つ
ら
ぬ
が
早
い
ら
ら
て
元
所
一
に
分
世
辞
で
は
ら
が
金
銭
債
の
配
報
百
ら
な
い
税
は
才
色
を
備
て
居
る
不
動
金
に
陵
馬
慶
漢
を
来
て
走
る
る

縁
法
を
取
る

強を免れまいと思ふ。加之に令妹は超俗的
で世事の煩雑を厭ふ傾向がある。
と一種の西洋風の感化を受けられたかと
もあらうが僕のめを開いて西洋婦人の
如きは到底そなはらぬ美徳が多く男根
の衛生は到底免れないのとでありメメ
のめを有弱なる文学者の三〇〇のめを收
へるを洋書家の夫人とするならば簡単
天晴偽作の才媛を十分に発揮して夫
婦妻妾の極めて幸福なる家庭を形成さん

今と趣味

ふたりとも僕が美人で才媛なる令妹を申
し受けて一時の幸を楽しむのみまこ
とに浅墓なる考なれども思ふ新しく僕は相互
の性格を考へて永遠の幸福を求めわい
ひて第三に御承知のごとく僕は教員で
ありて收入は御所持なれども信ぜざる者で今日は
ちまちまの精一杯いたなれ〳〵敵手なる暮らし出出
来ず前途の遠遠なる想ひ到り少なからず我が
来る為白状せねばならぬ僕は令妹を強ひてこの
苦痛を忍ばせるに忍びぬ御承知

の◎僕の母は女大学の教育主義に陶冶された
名ゝその人全く屋根裏の
の一部なると云ふ迄は
御断をする君が僕のためを
を呉れられた御意志は長く記憶して
て忘れないし
また御意を表し成らぬ御強を
いのである上述のごとく つまり金妹の一生の作業
者として僕が適化者
らか僕の意の在り
ところを酌んで呉れた

十ノ二十 松屋製

◎右迄の

特技事を有する◎御申越に対して
は十分御意を表し
胸臆を吐露し意
厚は十分貴兄
墓の点を加へ
掘出すから自強
さう和
なるゆえ
なるから又
等云ふ事

百合

御
かつ
ゝ
立を
一
ほの
鈴
に
今回の
話は
妹も
未だ
詳細を知
望するから
せる事は
かゝる事ありたるは
本ついて
為に今回の
ようや

に教弥まゝ供
養を依頼し
ゐるて、者只が平生に
慢活に其下男つ
強慢ゝ供て
ゝも之あり供間
の御弥ゝ
て中ゝ人
山の神が久ゝ御不伺で金の要る度
持て来て今日
陵ゝなり
つて金の借用が来た金言は
多いことは日ゝ
はて小が非常の多額である書夜並行
といはるはかりに
みん女竹庵赤つの係事公に
日は毎日とるの
山の借用をそ
御不伺で金の要る度
国の来た病で見
ゝ
ゝ
ゝ

扨あなたが一緒となり信信も三個月常
つて居るが、ふはは大屋に頼人で来月まで
待つて世ちふことん、さて、者ち、て親
爺へ逆ふ屋たが貧に困つんめ(ふ)に物は
無い、一六銀行に預けん、張つて居るのは
二百円三十六の我羅者多はのりとられ
かるるものなり、性一の報は来月の五日迄
にたるとの、一路計い阿場物の這ふる
ふかてふまでの要者の手紙で問に合せて出へ
まいか毎月の家ら拵へんの月家に頼
かして呉れ即刻通手待つ

十八二十松屋製

あんの

居辺初

いつこうの同下村の名書何ふ高工夫日
てして見中ませて二百円の中い発報ん
中一上ふ、あ中ふ、あてい女ふん、ふ、び
待つて居て呉れ、常のあちこ伯辺初
て上ふ家ながら等ち人の伯ち庭ねら多
てはは丹一刻ち姫孫ふ家ふ、ふぶと
て無い神は振ふ家ふ酢を陽ん
情のてい用立て徹を高の母
ん飯て今ふ小ふそみづから△△の家へ

出かけ、髪つて御問に合せることにする。
婦は此方仕出しに出かけ、
して居て解みは
帰りに巻き戻る間隙なるかとて
次第遅くなるまいと思ひ
て其儘へ帰宅。
あと

墨絵なる方に
君が遺絵の多くなることは今に始まり
ぬ事なれども今度は
かゝる事は無かりしと思ひし
て、あまりに
只感一つ
まず平生
に言はれては
候ものゝ
此度御蔭
にて
方角の計畫も目出

なく、外の色を活き活きと燈かす。
はかの屋根に風が吹くかと思って屋根の
方を見ると、まっ白なまんまばかり、こんな
等らしい。

◎秋夕方を歩く

月下庭前の白菊は新しいはぬ
出来ぬ。陣笠を懐ろに考える。

◎弛い気分の中に張り
昨夜は大変弛い相撲よりよっぽど
揚句には前後を忘れるほど迷惑
いたずらの連発。まこと風流な
人達。まて電車より帰る路すがら電車
と並び歩く。酔を醒まそうと満洲たる
かがれ田舎門まで来たら夏
から冷えを後より追ひ来る様な音
振り向つて見れば婦人二人の一人
きまりの悪さは有るまい。

は

さん この美人は何かの少年に向つて何か言ふと言
ふ者がのら侍を勝にもぢり〳〵ゐる侍
個格なる婚姻を結んだ様子はたるは
恍惚陶然の境遇を言ふもんありて
隣の結切りの此美人の夫婦の
ちらちらから来まうが器量が何かせむ
と異〳〵畑の美人は侍
達を移し来りて鈴筆にて書きたる
小紙を示す侍
不審顔なる時に

下にて一番に侍
ゐ者の今物帝国劇場に住つゐる
り達は連小の者は
者才を信田子
物宋すが松
連小下する者
心を徐物ー
水青の跡
小さが強み
侍田屋出身
東京貞物来
その婦
困まつて
徐仁と思
人び徐
京まで徐
人びたるか
いつん
蒼空流の
かく侍
静に歌を
自分ある
花を婦人も

と思い出すには色々と試みて見たが仕方がない
して居たらこの時小さな難点一時出て来た
年老いて物の哀れを信ずる婆さんを知らず不
悟と思の解り方が所の主人公を待せて孫兵衛
平生見やり方が好きな人間男女ともに
たる色男の話も彩りなる格好もあれば
俳諧の歌女は非常の美人で兄弟は
命惜しだは返すかもしれぬ
[illegible]
かつる改間を殊の外哀
はは出勤前五分の間
[illegible]

日露戦争
浩世界の為仕方なくて
ちて安きを求めて
静の物思ん砂て
より得ては自分
る、人い数を見
叫ぶ山々の
は不思議なる
はこの動機が
持て行一て

から不ことなりしことも出来ぬ
[illegible]府中安堂寺町の一笑
を訪ねて迫ぜぬ俳諧の
ものの三角[illegible]の家哲学が演説
に最近の仏蘭でもする
俳の刻下の境遇を問題
へ結は後便毎々

高岡

の話さまし[illegible]こと月後[illegible]を初
[illegible]ことこと同じく月後[illegible]書三味に暮の
てちゃんとこと[illegible]くを[illegible]鏡に向つゝ我
[illegible]ちから[illegible]ちから別人に[illegible]の[illegible]
[illegible]に似[illegible]天地の間唯一宝[illegible]と皆
の術を嘲り[illegible]知み[illegible]面白[illegible]
[illegible]者[illegible]かゝ[illegible]
[illegible]の[illegible]無[illegible]は全く[illegible]
何の[illegible]

皇天未だ世を棄てず今日あるを如何ぞ
如何ぞ天平の阿堵物を棄て事久敷
く無き人間の思いを
行き消えるを行き又来たるを男女味
噌を写し苦かるを一道の光明
を観ぬ人は未だ悟らず御伺
申すべき光は御祝意御一光
すべき宮を近況の概略御報申し上
げ奉る

○写真の交換を終す
すでに昔七一の人は、まことに夢のごと
無髪の日昔、君と七年を持へて某山某
水に釣遊せしは昨日のやうに思ふも恰年
はらくも経ます陽国三景の内厳島
長不ふるの影早千ふる四年の星霜を過
ごし人生の間の月花をしらに此の世
憂世をはたらく例候の如くに者共
出来ざるを残りん古雪の説会よりの
小弟は之の田舎に居ん今屋の倉に泊く

ながら行李は一船に陽つる。然はこれ
御見物なるべしとかつて二人にて描
いしかの日色紙形の冨士は大分の出来
いかゝにて新しきを一幅雲山萬里の
様を描るはあの見い御送りとすれば
中小節の句強御覧にかゝし寒ぶ
る品たにて大ぶ揚句しかし今よ
旦夕たゝぬ中いに次の句右にまるすべら
聖く御物の果ら（後不宣）

十ノ二十 松屋製

四月十六日 遠足い侍ふ

社ちらして時雨毛肥こたゝり明日の晴
を待て結構に過ぎたれば何の張合なる
べく且つ先年受合なれば如何の
約束通り遠足を奉行いたすべく基
西君と大隈侯の結果目昭地
は百草園と定め紙上にて御出馬
希望申上ぬ強へ豊兄は一時
来年の古つけるの御指揮
官と仰ぐことに別て俗

一時抜き出し集合の事　兵粮は各自持参　帰途には各の麺面を三日分
天機は容易に測り難く　速に帰早之
○現実を忘れ　郷里の男女が用の為　郷土京西三日
帰途の名残惜しく　一日者夫と暫し　盃
を傾ける江郷十年の事など　御弘弘れ
を出て一路岡山　明日御近藤の後　墨上の
某寺にて御相賀　夫まいまで　第一親
友ちからは重宝　夫を持日御指定　ちよ
たくりかえる　抜迫　一緒回報を待ち

一写真撮行の

○遠足の途中より
僕の各体験である　茶店から見える景色
は大略次の如く　遠山の何かの如き木
カ豊無　夕ねん映えて在る廃
は　ここへンシヨナルだが　寺　壁
門の文人中書家が　先輩に　一
律をもって来るのだ　僕のは信れも何れ
もよって居ぬが　書陽面白いと忘れ
一心に写　なおも　僕が感じた心の
雲の或　何が面白　あの黄葉の色

の色が出ないでは指なぬ事除この通り
の色でなる事[illegible]
[illegible]
[illegible]
て行かうと思ふ

○釣人さんの

品川のまつり鮫大学面白い所也毛借字
い釣らんやうな問抜な事で居ます海面で
釣る長ん[illegible]釣竿を肩にかし溜池の水に海を
[illegible]羅の事を小母個の清世でもらう[illegible]

○仮世界よりの

去る[illegible]八月八日宇品出帆今日寄港者
所の殿へ仮世界全者より申[illegible]
郷すりメメん向て進軍べく[illegible]
る敵の和蘭地へ移り之を却せ
のみ小ば止まざる設定なりば我が防国の
位務の重大なる[illegible]言を待たず[illegible]小
[illegible]の事[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○国の
[illegible]

は高の一兵卒にて何と申すこそ
なく候へども少と等閑
国を形成し力後はけしめん大
なる任命を力す事に候へば今人立自重
せざるべからざることを今更病中感
い申し候なお御いは毎日妻あ
ぶる忘れ難き恩愛の情は実に品
出来の陰ふつつと思ひ切り兵今ん
ては別思ひ出すこともこれたる
い陣中なる身は一回の私情の

絶なるも覚えなくなる
なる書ていみ面信し家元のつは、安
と疎漏ん弱なるよ出ば御所の方等
べく御侍序下さ不たく好なる出明日
の大戦死なることう覚悟のおら候か
へ今死なるはなまい是気なく女房等
て戦況を報ずる幸を祈り居り候今
宵月明なるて外の霜氣肌に沒
ノ歳ち柏系遠て帰りく出やるべ
こ候

○夫人を除く外は皆に成つたん場合の事は
かの方は角御御
後陽に死が嗜まれ
また仰ぶい様の景色
古仕を教らしかるる後悔さまん云ひ出だ
迎御の如ちまもん。ふ文しての時の
陛は夢から上げ
制笑位写引ならこと
の二を色ん財
表を構へ
京最北ん
居石は
ことを
ことを
珍は
の
の
の
の
の

○陣中より
国王方陸の
柳橋時
野水は
土の
す風
ら如
庭
異域
を陸
柳橋自の言果はり毒
煙
月
月
月

降し　小前哨長より当を来る度度意
の程昇り組け　耳も隠ち　山ばかり　報
い陰雲を拭つぶ　知らは　雪花ばかり
す　寒さと見ずが　充て　遠ち　降り来
り　仰ぎ見の　陰　躍は　申しまして　合唱
唱ち　銘世界　理に　移て　演出さ　ゝ
い　信　生　伐　遠　敵　△○軍　機　作　所
　　所の　奏　戦ち　奏　ん　紙　ま
三　塊　石　山　所　山　の　大　慶　戦　れ　の　形　て　明
る　人　鍋　ま　れ　ま　ば　る　人　鍋　ま　れ　ま　る　軍　鍋　ま　ば

馬を射る底の大吉は壮絶悲壮
最角に高人死　死　悲　壮　備　屋　塊　の　悲
悲の　紀　兵　兵　は　陸　の　陸　て　の　陸
山　陣　地　ら　部　の　榴　霰　弾　雨　は　無　近
み　鈴　の　ひ　き　る　陸　と　奏　眼　お　ま　家　戦
は　動　上　延　人　の　夜　に　形　て　故　隊　ま　た　海
陸　か　ら　連　く　怖　ろ　く　数　と　又　面　白
陸　接　戦　中　に　自　様　い　心　臓　を　掴　え　ん
人　陸　に　無　我　夢　中　い　色　作　ま　み　御　悩　笑
ち　さ　人　ち　く　仰　日　方　陸　に　遠　東　街　道　へ

於て対戦中の殊に
長州藩の如き小衝突は日々殆んど絶
なる砲撃の音を聞き
此度戒厳令時に
日頃人のうわさ
一隊全く出ず
雲天命地の大活動も
一軍の兵気
下の剣を振
一兵も出撃を勉強
力に関係式三
天長節日命名盛
角形劉慶

御を陛下
陸を出発
し指が高
軽軽なる
ふかめを
如き夫長
此度は
一兵も
名古屋の
西戸府
乗馬いか
輪御
鉄砲隊
往来
石虎の
宮に乗
立つの
近況
報道中

（日）
十ノ三

西郷隊長の夫長を
御報告す

仏事施行の際は本団日移霜降り
雪もちらつく様になる
いの不浄金と意料外
の水無瀬をなせさるのい霜降
るる雪の如くとなりて無常の
地獄なりて大の黄葉は時雨
舞ふのみ白堊の
思ひ寄らぬ俗
高宝徴雪なく
小田法文

信根なるを今の武蔵野の月なれば
到底比較すべきにあらず唐
寺の寒里無雲月平中といひ萬里無雲
月一流といつる寺院のはし〳〵往面の
さるを情ら俗面の侍の思後月前の
霜の如くにこそ
時中然る疑ひ〳〵花をもて見る
間に時節一見桜花開の殿
呈示仏事の花は尽
仏事なるを如何ばかりなる

しかるに決して敬ってまこと
に清高の奇の程小供何カ一句の如
き解らぬ事思い付きるが遠慮小供
なれ等は之を候と線香
代りなれば変なれん小供せっかく
軍なるべしと存じ候
中一い存じ候小供身無位征
はなん供。不一。

十ノ二十 松屋製

一昨日は合掌の合に拙つりん世話
なる品にて御中が陳所はらいん
変不供母上の事を御志はかいなる
とも小ども小さん遠方
母上遠方の事
家意義平思を強意回腹格気なる
事なれば不はまこと遠慮せとふ
ん言自分等等等移り供。
要立ち供はば何卒小さん

一、御相先下ふざけ中、小さな家
をもうけて、勉学させ、
なども、移の家をも在せず、僧とは申せ
ども、田上の荒ーをん、此の家、全くその原
にて、僧、甚だ慢らず、中、僧なれども
十年、経て、高
野の品々を、買ひ、弟子、弘法、附かむ
為、上、その、精へ、修行
目、東のこと、移り、僧、上ること
三年、僧の外、中、上くつ、高野、
十ノ二十枚目
僧、修行、

高野、をとは、弘法、
て、帰り、山、中、
宝、俄、加、
人、格、の、
中、は、風、
と、西、
京、
は、
金、
の、
高野、を、
高、
高、
高

生すれば、たまらぬ三あり
候ての御子に行けば、二の子の家業
は別に分業にして敵にも悟ぜず一枚の絵
の出来行く平常敵にも悟ぜず一枚の絵
にぜひとも仕上げて加子に仕上げる
覚悟を三度二三枚絵師に仕上げ
ちゃ強いて絵師の

十ノ二十 松屋製

一年志願兵をかりたん
祥陸軍兵は徴兵検査を受けられ
一度甲種合格したら直ち一年志
願兵を願い出る
の政府より補助を受
い御書なるべ由天つ国家のため一度
賀春ら御招ら軍隊生活は一種特殊の
ものにて、ないものの中は苦しーさん相違ありぬ
唯古城高等学校服装に忠実なれ
ば、天に十分の他人つかまこと
三あるべし御書兄は今日高等商業

御手書の上直に御然機なれば早速書面に認めて御志望の由にすの如く御伺ひ一年の兵営生活おん情実の為上申の如く陸軍極と力説致すやうの御挙動に定めて三年の事なれば一年の事なれば如何

たゞ一年の事なれば強来りの歌のみ所のみ引きかへて強力腕力を鍛錬する迄無陣の結果初めて大い有数の事なれば

七月廿日の君を見送る近き事と存ず

安部英

なるべくなれば今の御身御自愛

十ノ二十 松屋製

の時を設ける

軍隊生活は実に微兵検査を受けた日

小倉歩兵第十四連隊に入営した此度は衛戍

聯隊へ行く由大変な相

の事なれば軍人の国家の干城

なるべくことを申すまでもなく

二十四歳の男子は丁種

石合格となる事の目的は実に良

すべき事の様に存ず

初陣は未だ軍隊生活

慣れざる為

規律の厳なる
正に處罰さるべき
性質なり然るに
かゝる手段を設い後
こゝに同しく事件の
こゝに帝国軍人の
堪能なる者
なるべき者
なるべき者
小説行の義務
事件の御教育

（立憲）

所謂の至いなり
◎右の如
小説の芸
つ新聞
段の呼い
小説の
生活の
生活の
生活

拾ッ〜軍地を立ち
ッ〜鶴田を脱出
こと〜出発の
よと同時の事し
毒瓦斯ッて大こと
は傳聴の方ん
が見事男子
相の方
にて岐阜
御安心
中上げ

十ノ二十 松屋製

○勢焼見事
此三更出発
皇土より出で
家の兵角と
に例のめ
立てつゆ
出ずく
絶実戦は
仕の宅い
持参して

用の品なれば御遠慮なく御申越
下さるべく候間宜敷申上候
尚又御報告御一同様へ御
挨拶申上かねて何卒御伝
かはりの事いと御願申上候
一生之御
志為なれば宜しく也

○洋画展覧会の絵葉書
永田なる人より招
て陳々舊々なる
此葉書は三十銭

○私の為い善き
白紙の陳も追ぐと
本月は開学なれ
ば今年も早や暮
ぬ月日の経て仕
たる思ふ御陳
次に小生も無異
く過ごせる何卒御安心下さ
代も暮れ
山の月
小ば

七月

○何卒御安心下さ
ると
雪は今
里相隔
信も
忘角い師走へ極り申候

去年の四月末頃迄御出ありし際
お宿の松に月は残れど雖亡の面影
ありしかと思へば夜も明け月明の
国の波無数の野辺に消えて残りし
ハリかとその思ふる朝父君の
ぬる常盤の花も陽の光なつて遠く去りぬ
水与の柳のあら[illegible]この頃もこうして
往かんとすれば[illegible]時鳥の一声に
[illegible]陽の君[illegible]
[illegible]

相

十ノ二十松屋製

[illegible]
[illegible]
[illegible]

一つ代作を頼とおもふてしやう長子は十行二十字の罫紙に校内容住所加者をと地名多つたんとつて居不面へこてあ日まん足紙迄りてきい伊予郷報申す

◎お返事

御申越の取方はほんに困りの仕りいろ工夫仕てみたれども先来左様に四角張つた物ならば到底出来こたとてこの書も二三集めを見

十ノ二十 松屋製

京に居時間の内の上は史と政治の際を生ずる外之ち仕方なく早く御断りなば善かりん出来ぬ故先上申ひと度一応ようとの見込 近延せ 沈帝平へ御行下さ小ちく候

◎金申ちの陽

今朝出発前ちの家へ机の上へ京小置を候ゆはやた来来友は今回極申内の書類を見なば之の書籍書沈京書留中迄に京都出

仰の定義に依て仰出遊ばされ
（大隅殿より）

○書籍を借用願

等閑稀有の仰出越の書籍は人間世
に散る吹雪の如く執事の力を以て
なる貴下の所有に帰する方は力に役立
て書籍を物の手意なしと存
る度思しめよ我意を要て快義上
ほまなる所に行左様に成ては
明白なる仰使下不仰使一生涯

（遊就館）

所仰使は・異上の君子の御者宅
に御蔵の書籍品物
に無利借用〜立ち出り御由
なる為に仰出
不日判明なる為に行度き仰
も特別勅令書を申すべく仰
さは一時の仰不自由さ
迷惑の為なる
なる仰申聞なる

御見舞まで一すじに上京

の方面の

異上の景色は実に絶景の如き景色に接し

して居ると云ふ処迄行き

居ると云ふ処で春の暮れは

も永き日なれども

後の光景は例の様に時計の

ように物の出来られ

ないと云ふ様な

い所ら位

十ノ二十松屋製

◎◎久々の旅の宿々より弟へ

(一)

大急ぎで新橋へ駆けつけると

に汽車が出た

て不わる電車

の方は、

(二)

東京に泊つた

大阪より先ず

書中先ず

団子坂合

府津で下車すると日が暮れて

今宵こゝに泊つた

東京神社

たの朝早く参詣する

(三)

転便鉄道の間抜けさ

きこと、

加減なその家居

嘆へ七値する

熱海は山海の新

富人で

善い所は

相模灘

書寒倉の

遠くは一すじ合ひの蓮池なると映じて燃ん傾ん
ば大湯の煙が手に取るばかりん見えて

(三)

い軍艦の神社家の墓すんん遠帝ーん山
血なる懐古の気ん映つたる書の中に見
えるのは猫鈴の湯もかし法大師か猫鈴
をいて嶽を掘つたる湯口といふこと山の
名は黄昏搜えつかりかるとる於て浴室
移りてのちまるで山寺へでも泊まつたや
うだ。

(四)

修善寺の東方五里田まで三里達磨峠を越
えるのである。箱根の眺は格別で物下
の駿河湾も陽てる富士嶽如たる
山々峯を作りさ海山映畫くりも勝れ
る戸田の沖は去る大正三年の正月沈没
艦朔の名無残なる百位の遺骸
無数い葬られん廟である。君子は危き
近よらずを云ひ明るは近ひと知り
て江浦の沿岸も回て沼津へつ

特ら[illegible]じる。

○歳暮物ゝ頒る

はやくゝあいはゝとゝゝ定めて御[illegible]

い事でありまゝ。ゝゝゝ同様ゝのゝん[illegible]

二月するこゝゝ出来兼ねまゝ。時年年は一

方ならぬ御厚情ゝ何ゝゝ御礼の中

移りあるまゝ。別封の品は此海道の産

戦ゝ面ゝ寄せゝ。まゝゝゝ詰ゝ

物でゝ。ゝゝ人の御ゝゝ御喜所

まゝ美ゝおゝゝた。左様ゝ。